

# 『紅樓夢』と『源氏物語』における恋愛

尚 会鵬著 『中国人と日本人』より

孫 佩 霞 ・ 谷 中 信 一

## はじめに

本文は、尚会鵬著『中国人と日本人』（北京大学出版社 一九九九）第六章両性之間において日中の伝統的性文化を比較考察した部分の邦訳である。

訳出に当たり、先ず孫佩霞が本章を全訳した後、谷中が第二節部分を抜粋し、若干の手を加えて定稿とした。従って、ここに誤りがあるとなれば、それはすべて谷中の責任である。

本文には原注があるが、さらに必要に応じて訳注を施した。

中国と日本にはそれぞれ、「大旨、情を物語る」を主題とする偉大な文学作品がある。すなわち、『紅樓夢』と『源氏物語』<sup>(原注1)</sup>だ。中国国内には、この二作品について既にいくつかの比較研究が見られる。<sup>(原注2)</sup>これらの研究を一通り検討した結果、筆者は次のような見解を得た。つまりこれ

らの研究は、両作品の類似点に注目するだけで文化的相違点についての分析が十分ではないということだ。この二作品には確かに多くの類似点があるし、これらの類似点を分析することはそれぞれの鑑賞と研究に有益だが、両者の相違点を看過すべきではない。しかも相似点の方は表面的で相違点の方が本質的であると考えている私にとつては、相違点を把握しておくことがこの二作品を鑑賞し理解するうえで重要だろうと思う。例えば、表面上この二作品はともに恋愛を主題とし、男主人公と大勢の女性との間の恋愛ゲームを描いているが、しかし文化的背景の違いによって、この主題が内包している意味や、主人公の性格、及び恋愛の表現方法などはすべて全く異なっている。こうした差異はこの二作品が生まれた時代背景や、二つの文化がそれぞれ持っている性意識とも関連している。結局のところ、二つの文化、二つの民族の心のあり方がもたらした差異なのだ。本論は大胆にも性文化の差異という角度からこの二作品に現れた恋愛という主題を考察するものであるが、一面で中日それぞれの伝統文化を理解するうえでいくらか参考になるかも知れない。

## 一 時代と文化的背景の違い

性のことを罪と見なさないことでは中日両文化は一致しているが、性についての意識や作法という点ではやはり大きく異なっている。『紅樓夢』も『源氏物語』も、その主題としての恋愛についてはこのような背景の中で理解すべきだと思う。

『源氏物語』の恋愛を検討する際、次のような事実も考慮しなければなるまい。つまり『源氏物語』は千年も前に書かれたので、その時代の日本人の性道徳は中国人ばかりか現代の日本人と比べてももっとルーズだったということだ。これがこの二作品の恋愛という主題を理解するうえでの基本的な出発点になるだろう。

以下、この基本的差異は二作品の中にどのように表現されたかについて考察していこう。

『紅樓夢』の男主人公賈宝玉かほうぎよくも、『源氏物語』の男主人公光源氏ひかりげんじも、性のパートナーは一人だけではなかった。表面上は、彼らはいずれも「一夫多妻」だったように見えるが、実際には両者の間には本質的な差異があった。中国の「一夫多妻制」は、「性に対する厳格な制限」を特徴としている。昔、中国の金持ちの男性は婚姻以外の性関係を持つことができたが、その文化の傾向と社会世論はできる限り婚姻という枠の中に収めることを求めた。これが中国の「納妾制度」だ。一方、当時日本の「一夫多妻制」には群婚の特徴がまだ残っていた。光源氏には十何人も性のパートナーがいた。彼は葵の上と結婚しても、同時に他の十何人も女性と関係を持つている。小説の描き方から見て、日本が中国から男女関係に関する一連の道徳規範を導入し、一夫一婦制が実行され始め

たばかりの時期だったので、日本社会ではおそらく「通い婚」と「一夫一婦制」とが併存していたか、あるいは前者から後者への過渡期にあったと推測してよさそうである。『源氏物語』にはすべての性のパートナーを婚姻の枠の中に収めさせようとする社会のプレッシャーも見られなければ、源氏本人にもこういった努力は見られない。源氏のこうした行為は、当時の日本の若くて魅力があり地位もある男性にとって極めて普通のことだったのであろう。源氏は継母である藤壺の上と関係を持ち、そして二人の間に冷泉帝が生まれた。名義上は桐壺天皇の子、源氏の同父異母弟に当たるが、実際は源氏と藤壺の私生児である。源氏のもう一人の妻三ノ宮が自分の従兄弟に当たる柏木と密通したのも、ある種の不倫である。概して言えば、当時の支配階級は中国文化の影響が比較的強かったけれども、一般民衆の性についての束縛はもっとルーズなものであった。

安定した「一夫一婦制」が、元来の「自由奔放」な「通い婚」制度との間に激しい衝突を引き起こすことは至極当然のことであった。このような衝突は、『源氏物語』では象徴的方法によって表現されている。つまり六条御息所を代表とする上流階級の女性の中流女性に対する激しい嫉妬と源氏の正妻葵の上に対する激しい憎悪がそれだ。六条の妃（六条御息所）が源氏より七つ年上で、美しい上に教養もあり地位も高い。源氏は彼女を恋慕するが、しかし彼女の権勢と高い地位は源氏にプレッシャーをかけ、とうとう二人の間は疎遠になってしまふ。六条の妃は怒りついに気が触れて、「生き霊」となって人に取り憑き祟りをする。魂が本人の体から遊離して他人を取り殺すことができる「超能力者」になったのである（当時、生きている人の体からも魂が離れてゆき他人を殺すことができる信じられていた）。彼女は源氏の愛人夕顔に嫉妬して、

源氏との逢瀬の場で彼女を取り殺したし、また源氏の正妻葵の上をも嫉妬し、彼女が既に妊娠していることを聞きつけるやさらに嫉妬する。そこで葵の上の出産の最中に六条の妃の生き霊が彼女に取り憑いて、「だから、いつもとうとうとして夢心地になる頃、魂はどこかへ離れていき、葵の上の家とおぼしき所に着くと騒ぎを起こす。この時の彼女の性格は醒めているときは全く違い、凶暴そのものになってひたすら相手に攻めかかる。」ついに葵の上は彼女の祟りによって死んでしまった。彼女の嫉妬の原因は、葵の上が源氏の正妻だったことにある。「もともと愛されていた上に、今また子供を産み育てているので、彼の愛情が必然的に彼女一人に注がれることになった」からである。彼女の生き霊が夕顔や葵の上を取り殺したばかりでなく、死後も「ひどい方、ひどい方」と叫びながら紫の上に取り憑き、彼女をも人の世から連れ去ってしまった。

私は、この「生き霊が人に祟る」といわれた六条妃のイメージには象徴的な意味があると考えている。つまり、彼女は当時の日本の「自由奔放」な性生活の一面を代表しているのだ。葵の上、夕顔と紫の上を死に至らしめたのは、中国礼教のような種の社会規範の拘束がそうさせたと言ふよりは、むしろ六条妃の嫉妬であり、また彼女の背後にある深刻な雑婚制の名残りの「通い婚」制度によるものであったと言えよう。こうした嫉妬は、「愛情を必ず一人に注ぐ」「一夫一婦制からの抵抗であったと言えよう。本質的には、雑婚時代の自由恋愛と」「一夫一婦制」との衝突を反映している。『源氏物語』の作者紫式部が否定的なニュアンスで六条妃を描き、同情的な筆致で葵の上、紫の上を描いたのは、中流階層女性への共感だけでなく、さらに重要なのは作者の群婚制に対する否定と安定した「一夫一婦制」への憧憬をはっきり示しているというこ

とだ。作者は言う、「一夫一婦制だろつと、とにかく一番大事なことは人に愛されること。もしも二番目三番目の通い妻になるくらいなら、死んだ方がましよ」と。これは、当時すべての女性貴族が言いたくても言えなかった叫びであり、通い婚に対する批判と安定した一途な愛情生活への渴望である。六条妃が持っている超自然能力とは、あるいは人類の性本能が持つ破壊的な一面を象徴しているのかも知れないし、葵の上などに対する彼女の嫉妬は、人類の性本能が潜在意識下でようやく取り付けたばかりの「道徳ブレイク」<sup>(訳注1)</sup>と衝突しているのだと見なしてもよかるう。

これと対照的に、『紅樓夢』の生まれた文化的背景は「人食い」<sup>(訳注2)</sup>「礼教た」中国文化が性愛に設置したこの「ブレイク」中国人の性愛を固く閉じこめて既に何千年も経つてから、世の中に愛情の自由を求める萌芽が現れた。『紅樓夢』に表現された恋愛の主題は、旧礼教という「道徳ブレイク」に対する無意識の反抗であり、ある種の健康で自由ながらもロマンティックな愛情生活をおぼるげながらも求めようとしたこととの反映なのだ。こうした憧れは、当時の伝統と激しく衝突した。私たちはこの作品からこうした衝突についての象徴的な描写を見出すことができる。すなわち第八十二回「新しい学究が講義 頑心を警すこと 病める瀟湘が癡魂 悪夢に驚くこと」のなかで、林黛玉が次のような悪夢を見たのである。すなわち、彼女の父親が湖北の食糧長官に昇格し継母を娶った。そして賈雨村に媒酌人になってもらい、林黛玉をその継母の親戚に嫁がせたが、やはりそれは後妻だった。鳳姐、邢夫人、王夫人、宝釵たちは皆見送りに来て祝った。黛玉は、一家の長老であり一番の権力者である外祖母に助けを求め、両膝をついて跪き、足にすがりついて「おばあちゃん、助けて」と頼むが、そのおばあちゃんは冷たくしかも

嫌そうな顔つきで知らんぷりをしている。この夢は、事実上ヒロインの自由な愛情への憧れにとつて致命的なダメージとなった。夢に登場した人物はほとんど買家の旧世代を代表しており、凝縮された社会そのもののイメージであり、また「人食い」礼教という「ブレイキ」全体の象徴でもある。この夢は林黛玉の死に直接関係していく。というはこの悪夢を見てから、黛玉の病状がどんどん悪化し、ついには憂鬱の中で息を引き取ったからだ。この夢という象徴的な方法を用いて、ヒロインを殺したのは人々を千年以上も縛り付けてきた旧礼教であり社会全体であると、私たちに訴えかけているのだ。『紅樓夢』の中で、私たちがおぼろげに感じ取るのは、旧礼教という「ブレイキ」の抑圧のもとでは、自由な愛情生活への憧れや個人の魂の懊悩がさらにひどくなる一方だということであった。こうした憧れと懊悩は、ある意味ではヨーロッパルネサンス期の作品に表れた感情に類似している。これは愛情に対して自由でありたいという憧れと、個性の解放への渴望であり、そして礼教という伝統的「ブレイキ」への挑戦でもあった。こうした感情は、同様な文化的背景をもつ中国人の共鳴を呼び醒ますことができた。『紅樓夢』に描かれた恋愛の進歩的な意義もここにある。

ところが『源氏物語』にはこういった性質の衝突は見られない。なぜなら当時の日本には、中国の旧礼教のような厳格な道徳「ブレイキ」による抑圧がなかったからだ。『源氏物語』に表現されたのは、むしろ群婚の特徴を帯びた一夫多妻制下に暮らす女性たちの苦悩そのものであり、安定し真心のこもった愛情生活に対する彼女たちの憧れだったと言える。これは『紅樓夢』に現れた恋愛の主題とは全く違う意味を持つ。『源氏物語』に表現された女性の恋愛に対する態度は、エンゲルスがかつて分析したように、雑婚から一夫一婦制に至る過渡期にある女性たち

の心理に全く一致していると私は思う。彼は次のように分析する。すなわち「バツハオーフェンは、彼のいわゆる『娼婦制』もしくは『紊乱生殖』から一夫一婦制への移行は主として女性によって達成されたときっぱり断定しているが、全くその通りだ。古来から続いた両性間の関係は、経済的生活諸条件の発展につれて、従つてまた古い共産制の解体と人口密度の増加につれ、かつまた森林での原始的の素朴さを失うにつれて、女性たちは必然的にますます忍従と抑圧を感じる事となった。つまり彼女たちは、ますます切実に貞操権を手に入れること、すなわち一時的もしくは永続的にただ一人の男性と結婚する権利を手に入れることによつて、みずからを救い出す方法とせざるを得なかつたのだ。なぜならこうした進歩は、男性側からなされることは決してあり得ず、少なくとも男性側には思い至るはずもないからだ。あまつさえ事実上の集団婚の快樂を断念しようなどは、今日に至るも男性は考えつくはずがない」と。『源氏物語』の情愛についての描写の進歩的な意義は、まさにここにこそあると私は思う。

## 二 主人公の「愛」及び内心の矛盾

二作品はともに「博愛」の感情を持つ主人公を作り上げている。すなわち賈宝玉と光源氏だ。表面的に見れば、この二人にはいくつかの共通点がある。例えば、彼らはともに「癡れ心」を持ち、高貴な身分を持ち、際立つた美貌と抜群の聡明さを持っている。これらのことは、彼らが女性たちの間で「博愛」的であるのに有利な条件を提供した。賈宝玉は侍女の襲人及び他の数人の女性と曖昧な関係を持ったが、しかしこれらの関係によつて彼が黛玉に言い寄ることを諦めなければならないわけ

ではなかった。それと同時に彼は宝釵にも思いを寄せていて、いつも「黛玉を見ると宝釵を忘れ、宝釵を見ると黛玉を忘れてしまう」といった調子であった。また作品中に、彼が一人の俳優と同性愛の関係にあったことも仄めかされている。源氏の恋人はもつと多かった。彼には、正妻の葵の上の他にも継母である藤壺の上をひどく恋しており、しかも関係を保持してしまう。それから自分よりも七歳年上の六条御息所と密通しながら、藤壺の姪に当たる紫の上にも思いを寄せる。夫のいる空蝉をしつこく追いかける一方で、空蝉の義理の娘に当たる端菝にまで手をつける。夕顔や末摘花などの女性たちとも曖昧な関係がある。

ここでわれわれが、この二人の行為を二つの異なった文化的背景の中に置いて考察すると、この二人の人物の性格と行為とはそれぞれ全く違った意味のあることに気付く。第一に、この二人の「博愛」行為が二つの社会の中で受けた評価が違っていることだ。源氏の「博愛」は、當時行われていた一夫多妻制と、「通い婚」を前提としていたものだ。「通い婚」がまだ行われていた社会では、恋した女性のひとりひとりを忘れず心にとめ、美醜を問わず一度愛したことがあれば捨てることはしないという行為が、むしろ「情が深い」ことの現れであり、これは当時の日本では理想的男性像だったようだ。彼の行為は、当時当たり前のことと考えられていた。それゆえその時代の日本人は、中国人のように礼教によって教育された道德観がなかったばかりか、現代の日本人にとっての「不倫」といった意識すらもなかった。「好色」という言葉は、『源氏物語』及び多くの日本古典文学の中で、決して否定的な意味を持つものではない。『源氏物語』の作者も、肯定的な筆致で源氏を描いている。

ところが宝玉の行為に対する評価は全く別ものだ。宝玉の「博愛」行為は、伝統的中国社会ではより強い非難を被ることになる。彼が侍女の

襲人と関係を持ったのは、襲人が「遅かれ早かれ宝玉のもの」になることになっていたからだ。これは「性関係をできる限り婚姻の枠の中に収める」という中国人の原則に適合しているゆえに許されたのである。しかし他の女性に対する恋慕は中国人から見れば異常なことで、黛玉に対する愛情は「乱倫」行為となる。こうした感情は、礼教の厳しい中国においては、日本におけるよりもずっと厳しい非難を受けることになるので、結局は全く実現不可能なことなのだ。彼と金釧との戯れも許されることではない。なぜなら彼女は彼の婚姻の一部とはならないから。彼のああしたあらゆる女性に思いを寄せるという性分は、中国では責められるべきものだ。なぜなら彼は、「性愛を婚姻の枠の内に厳格に制限しておく」という礼教の原則に背いたから。もし彼に好きな若い女性ができて、それを自分の妾にするのなら構わない。つまり婚姻の軌道に乗せることになるから。その結果、彼の家に妻妾がひしめいていても責められることはない。そのうえ宝玉があんなふう立身出世に不熱心で、癡れ心や「博愛」に耽って、ちぎんと段取りされた「すばらしい良縁」の婚姻に満足せず、「取るに足らぬ腐れ縁」の愛情生活を追い求めるのも、中国の伝統的道德に背くことになる。宝玉は、源氏に比べると社会から受けるプレッシャーははるかに大きい。中国の旧礼教の觀念によれば、正当ならぬ情欲をほしのままにすると、社会や本人にとって非常によくない結果をもたらす懲らしめを受けることになる。もしもその者が君主であれば、必ずや国事や軍事の大計を誤り、天下を失うに相違ないし、もし一介の庶民であれば、必ずや荒淫の病かなんぞで死んでしまうに相違ない。中国の古典文学の中には、情欲をほしのままにしたために、国を滅ぼし身を滅ぼした物語が数知れない。例えばかの有名な唐の玄宗皇帝は楊貴妃への愛に溺れたために、叛乱を起こした安祿山によって都を追わ

れ馬腕坂まで落ちのびたものの、全軍が動こうとしなかったので、玄宗は楊貴妃を処刑するよう命じてようやく軍は動き出したと言われる。『金瓶梅』の男主人公は、愛欲に耽つたために荒淫の病で命を落とした。日本の典籍には、こういった類の教訓物や物語はずっと少ない。中国の旧礼教の観点に立てば、源氏は色欲に溺れた一介の無頼の徒に過ぎない。こうした中国式の教条は、今日の中国人の源氏に対する評価と『源氏物語』に対する理解にまで影響を及ぼしている。例えば源氏の性道徳を評価するとき、源氏の不謹慎な行為を「政治腐敗」や王朝の衰退と結びつけようとしがちだ。つまり「読者はこれらの物語を通じて、こういった人倫を乱した関係や墮落した生活が、政治腐敗のある種の投影であり、彼らの政治上の没落や衰退と因果関係にある」というのだ。中国の批評家は、紫式部が源氏を美化することにすこぶる不満を感じるように、彼らの考えによれば、紫式部自身が中流貴族家庭の出身ゆえに貴族社会の墮落に不満を抱き、貴族階級の没落を悲嘆しているものの、この敵しい現実や様々な習俗を否定することもまた超越することもできずに、源氏を自分の政治上の希望や理想に仕立て上げて、多方面から美化してしまっていると言う。このような一貴公子を、紫式部が、上品で雅やかで愛情深く義理堅く、才色兼備で、その上経世治国の才も兼ね備えているといった立派なイメージで描いたことが納得できない、と言う。けれども私は、こうした批判は当時の日本社会の現実からかけ離れていて、中国の伝統的道德教説の傾向が強すぎると思う。私は必ずしも文学作品を当時の社会や政治と関連づけて鑑賞することに反対するわけではなく、当時の皇族や貴族の生活から、もしかしたら当時の社会や政治の腐敗を窺い知る手掛かりが得られるかも知れないと思う。けれども光源氏の性道徳の乱れを、あまりに密接に王朝の衰退と結びつけるような

考え方は、『源氏物語』というこの文学作品に対し政治的意味あいを与え過ぎてしまうように思われる。源氏の行為を評価する際に、中国人の性道徳の基準を、私たちと違う性文化を背景にもち、しかも今から千年以上も昔の日本人に当てはめるようなことをしてはならない。

第二に、二人の男主人公は女性に対する観念や態度が異なっている。宝玉の「博愛」ぶりは、源氏よりもっと徹底的のためらいがない。彼は大観園の娘達に対して、貴賤を問わず同じように愛する。彼が幼いときに言った「痴れ言」に次のようなものがある、すなわち「女の子の体は水でできているけど、男は泥でできている。女の子を見ると僕は気持ち清々しくなるけど、男を見ると悪臭が鼻につくんだ」と。これは実際「女性崇拜」という極端な形式で女性尊重を表現したもので、近代の「男女平等」思想の萌芽もしくはその変態的な現れと言つてよい。こうした思想が、旧礼教に何千年もがっちり縛られて続けてきた中国に現れたことは、確かに進歩的な意義がある。ところが源氏が女性を愛するとき、彼女らに贅沢な衣食住を与えて、人も羨む生活をさせはするものの、かえって彼女らの内心の寂寥や苦痛には無頓着なのだ。このような愛情はペットを可愛がるのとよく似ている。彼のこうした態度は、結局のところ群婚制から一夫一婦制へと変わっていく過渡期にあつた男性が「決して群婚の快樂を手放すまい」としていることの現れに他ならない。彼が最も寵愛した紫の上でさえ、痛々しげに打ち明けて「傍目にはあなたがおつしやるように、私ごとき取るに足らぬ者が身に余る幸せを味わっていると見えましようが、胸には納めきれない悩みで本当は一杯なのを一体どなたがご存じでしょう」と。さらに源氏は「博愛」において貴賤を区別しないわけではない。彼には上下の階層意識が明らかにある。作者が巻二「雨夜の品定め」という一段で、左馬頭の言葉借り

て、女を出身門地によって上中下の三ランクに分けて、源氏は「中流の女が最も望ましい」という原則を守ろうとするのであった。彼が最も愛した夕顔や紫の上こそは、中流の出身なのだ。源氏の「博愛」における階層意識は、日本社会の上下の階層制度と密接に繋がっている。

第三に、二人が心の奥底に抱えていた矛盾が違っている。二人の主人公はともに、心の奥底に一つの深い矛盾を抱えていた。この彼らを悩ませ続ける矛盾はどついても解決できない。そのため結局、彼らは社会の現実から逃避する道を歩むほかなかった。しかしよくよく考えてみると、二人の主人公の内心の矛盾は、それぞれ異なった性質を持っていたことがわかる。賈宝玉の内心の矛盾は重層的だ。一つは心理的なもので、前述したように、『紅樓夢』の恋愛の主題が伝統礼教への反抗と、おぼろげながらも自由な愛情への憧れとを反映していることからして、「宝黛の愛」は反逆的要素を持っているというものだ。宝玉は反骨精神の持ち主で、「釣り合いのとれた」結婚へのこだわりを捨て、反対に「愛情に任せて行動」し、男女互いに引かれ合い、心が一つになるような愛情を求めている。これは「天理を存して、人欲を滅する」という礼教原則に背くものだし、社会の主流に立つ人がするべき行為でもない。それゆえ彼の行為は、当時の社会との間に大きな軋轢を生じた。もう一つの矛盾とは社会的なものだ。彼は「宮仕え生活」に未練がなく、毎日姉妹や侍女の間立ち交じって無為の日々を送る。かくして彼は、当時の上流社会の生活に適応できず、深い苦悩の淵に沈んでしまう。このように、二つの矛盾が彼を悩ませ、性格も風変わりなものにし、突拍子もない振る舞いをさせるようになる。彼は実際「病んでいる」状態にある。彼が患っている病いとは、異性を強く恋慕しながらも結ばれないことによる心理的な病気（つまり「恋の病い」）であるばかりでなく、

あまりに大きな社会的プレッシャーによって生じた「社会不適応症」でもあるのだ。この二つの病いは、当時どちらも「不治の病い」であり、最終的には「出家して僧侶になる」より他なかった。

一方の源氏は、基本的に社会に認知された正常人だ。彼には、異性を度を超して恋慕したあげく結ばれなかったという体験はない。というのは、当時の日本では、文化的にも制度的にもそういった障碍がなかったから、宝玉が患ったような心理的疾患はないわけである。さらに彼は権力者になるという点では成功はしていないが権勢に興味がないわけでもなかった。それどころか彼は、権勢欲に貪欲な人物であったために、賈宝玉が患ったような「社会不適応症」にもならなかった。しかし彼は、内心に別の深刻な矛盾を秘めていた、つまり「乱倫」への恐怖だ。継母藤壺との「乱倫」関係に対して、彼は深い悔恨と恐怖を感じており、この恐怖がずっと彼にまとわりついていた。物語では、源氏の乱倫行為が応報をもたらしたことを描き出している。つまり、彼の妻の一人三ノ宮が従兄弟に当たる柏木と密通していたことだ。彼は、妻と柏木との密通を知っていながら知らぬ振りをして、二人の間にできた子が源氏自身の子とされていることに何らなす術もなく、彼と馴染んだ女達もやがて次々世を去っていく。彼はこうした乱雑な性関係がもたらした結果にある自省を覚えるとともに、大変な苦悩に陥ってしまう。この「乱倫」に対する恐怖は、雑婚制から一夫一婦制へ向かう過渡期にある人類の普遍的な心理現象を反映しているのかも知れない。源氏がこのような恐怖に陥って抜けられなくなり、しかも時間とともにますます深く落ち込んでいったことから、ついには彼も「仏門に逃げ込む」道を歩むこととなったのだ。それゆえ彼と賈宝玉とは、結末のところでは非常に似ているものの、その原因は全く違っている。

### 三 美意識の差異

#### 求愛と茶道

芸術作風から見れば、二つの作品の恋愛描写は一樣でない。『源氏物語』の恋愛描写は、精密で「作法」や「過程」をより重視するところに特徴がある。ところが『紅樓夢』のそれは、感覚を通じて官能美を鑑賞することを重視する傾向がある。『源氏物語』の源氏の感情についての描写には、日本の特徴が見られる。彼は、四季折々の風物に対しての感受性が繊細かつ鋭敏なので、普段何気なく感傷的な気分に入り、時々涙を流しては、多くの感傷的な和歌を詠んでみせる。例えば、

吹き迷ふ 小山おろしに 夢さめて 涙もよほす 滝の音かな

とは、深山に分け入り、法華三昧を行う懺法の声を聞きながら、嘆いた歌である。その繊細ではかなげなところは、賈宝玉の及ばないところだ。作品に描かれた源氏の求愛の様子にも特徴が見られる。作者は「過程」の描写や情緒的な雰囲気づくりに多く筆を費やすばかりで、両性の官能的な美についての描写はなく、男女の交合についての直接的な描写など全くない。

源氏が女性を追い求めるところでは、その過程は非常に細かく描かれる。つまり際限のない手紙の往来、扇子の贈与、和歌の吟詠、琴の演奏など、細部についての描写が、まさに微に入り細を穿っている。ところが男女の情事についての描写となるとむしろ極めてあっさりしたもので、それを想像させるようなものさえないほどである。ここでは、こまごました求愛過程の方がその目的よりも重視され注意深く描写される。恋文の中の和歌について評価したり、交際時の礼儀は適切か、便箋の色や墨の濃淡、焚きしめた香の具合、加えて恋文が枯れた竹の枝に結ばれ

ているか、それとも風に吹き折られた刈萱かりかに添えられているか等々、「ゲーム」にはルールがあって従わなければならない。これらのルールに従わない者は無教養として軽蔑される。源氏は無論この道に精通しており、彼が高く評価される重要な根拠となっている。彼の息子の夕霧が女性と交際を始めた頃、こうしたことを知らずにいた。第二十八回の「野分のわき」で夜間に暴風が吹き荒れ、夕霧は明石の姫君を気にかける。そこで一首和歌を作る。「風さわぎ むら雲まがふ 夕べにも 忘るる間なく 忘れぬ君」と。彼は、この和歌を風に吹き折られた刈萱に添えて贈った。すると女房達は、「交野たのの少将（今では既に失われてしまった古代の代表的な恋愛小説）の恋文は便箋と同じ色の花が添えられるものでした。ところが、あなたは紫の便箋なのにどうして緑色の刈萱に添えて寄こすのかしら」と批評した。こうしたこまごましたことへのこだわりは中国の読者にはわかりにくいものだ。

『源氏物語』に現れている特徴、すなわち作法と過程が重視され、目的はあまり重視されないこと、また雰囲気作りが重視され、官能美はあまり重視されないことに関して、これを日本の美意識のひとつの現れだと総括することができるかどうかまだ断言できないが、しかしひとつのことに注意する必要がある。すなわち『源氏物語』中の恋愛描写に現れたこうした特徴は、日本人が茶道に示す美意識を彷彿させる。周知のように、茶道においては「茶を飲む」「過程が絶対化され意識化されていて、「茶を飲む」「ことそれ自体は二の次のこととされる。茶道の目的は「茶を飲む」ことではなく、儀式の過程そのものを味わうことであり、一種の雰囲気醸し出すことにある。そうしてこの雰囲気の中で修養し、一種特別な精神的美を体得させようとするのである。筆者の知るところでは、日本の華道にもいくらかこういった特徴がある。日本の文学作品の

情愛描写はまさしくこれに一致しているように思われる。重視するのは、求愛の過程であって目的ではなく、表現しようとするのはその過程における精神上の喜びと情緒的美の感受であって、五官に對し官能美をもちたらずことはその主な目的ではない。このような特徴はいうまでもなく作者の繊細な女性心理の特徴とも関係しているけれど、やはり日本の美意識がそこに現れているのではないかと思う。むろん『源氏物語』のように、まず音楽や詩歌を鑑賞し様々な儀式を通して情緒的雰囲気を出してからようやく男女が結ばれる描写に移るといのは、中国の古典文学作品にもないわけではないが、しかし『源氏物語』に比べると官能美を鑑賞することをより重視する傾向が見られると思うのだ。中国の古典文学作品は人の容貌についての描写がとてんで発達していて、通俗文学作品には「赤い唇に白い歯」「白い尻に美しい脚」といった類の語彙が豊富であることが一面でそのことを証明している。この二作品を読んで感ぜられるのは、『紅樓夢』には女子の容貌、性格、内的魅力などについての描写がかなりなされておられ、しかもそれらはとても成功している。それゆえ読者にとっては、これらの人物の魅力（内的魅力と外的魅力）を鑑賞することによって、美を享受することができる。『紅樓夢』中の恋愛についての直接的な描写は、『源氏物語』の類似の描写より遙かに多い。

われわれは、夕顔に對する源氏の求愛を例に、『源氏物語』の恋愛の表現方式が茶道に現れている精神とどれほど相違しているかを検討してみたい。源氏の求愛のプロセスは次のいくつかの順序を辿っている。

### 1. 幻想

ある日源氏が愛人の六条妃を訪ねていく途中、乳母の家で休息したと

き、偶然隣家に引き寄せられる。「檜垣というものを新しく作って、上の方は半部を四五間ほどずつと上げて、廉なども白くて涼しい感じがするが、その廉越しに、中の女たちの美しい顔のほの白い影がのぞいているのがいくつも見える。動きまわっているのかしらと物珍しくお感じになる。」この時、源氏には夕顔の容貌がはつきり見えなかったが、ぼんやりとして定かならぬ情景が、源氏に幻想と憧れの欲望をかきたてた。これが恋のゲーム全体のプロローグである。

### 2. 花を摘む

「切りかけめたものにとても青々とした蔓草がのびのびとはいまわっている、その蔓に白い花が夏の日中、他に花とてもなく、ひとりうれしげに咲き誇っている。源氏が「そちらの人にお聞きしたい」と独り言をおっしゃったところ、ご隨身がごとと跪いて「あの白く咲いた花を夕顔と申します。花の名はまるで人の名のようなので、こんなみずぼらしい垣根に咲きます」と申し上げる。…（君）『悲運な花だね。一花手折っておいで』とおっしゃると、隨身はこの開いている戸口を入っていき花を手折った。…と、不意にその戸口から黄色い生絹の単衣の袴をわざと裾長に着たかわいらしい女童が出てきて、隨身を手招きする。近寄ると、香でいぶした白い扇を、（童）『これに載せてさし上げなさい。枝も無様に見える花ですもの』と言って渡した。「かわいらしくてか弱い花が歌を題した香りいっぱい白い扇子に載せられる」ことによって、優雅でロマンティックな雰囲気が醸し出される。

### 3. 扇子の鑑賞

源氏が乳母の家を出る前に、「惟光に紙燭を持ってこさせて、先刻の

扇をご覧になると、使い慣らして移り香が深くしみこんで人懐かしく、美しい筆跡で一首書き流してある。

心あてに それかとぞみる 白露の 光そへたる 夕がほの花

無造作にさらりと書いた筆跡も上品に奥ゆかしく感じられるので、全く意外で興味深く感じる。「扇子と扇子上の題詩が再び彼の幻想と追求の欲望をかき立てる。「おきまりの女のことには軽々しいご性質なのであろう、おん懐紙に、すっかり違つたふうに筆跡をお変えになって、

よりにこそ それかとも 見めたそがれに ほのぼの見つる 花の

夕顔

と、さつきのご隨身にお持たせになる。」

扇子は、日本の能や歌舞伎など古典芸能において、感情表現に最もよく用いられる道具である。その役割は茶道具とほぼ同じである。というのも茶道では、茶道具の鑑賞がまたひとつの重要な内容になっているからである。

#### 4. 人を遣わして相手のことを探らせる

源氏は、夕顔の身元については何も知らない。そこで惟光（源氏の乳母の息子）を遣わしていろいろ探らせてみた。惟光は、まず泥棒のように戸口から覗き込んで中の様子を少しばかり盗み見てきたが、源氏は満足できそうになかった。そこでさらに惟光は、中の侍女と知り合いになり、その内部に入り込んで詳しい様子を探った。

#### 5. 逢瀬

源氏にしつこく迫られて、惟光が「知恵の限りを絞って探り、あちこち奔走して」手引きすることによって、源氏はようやくこの家の女主人

との逢瀬がかなう。ところが逢瀬の過程そのものの描写は、意外とあっさりしたものであった。作者は「そのところはうるさいことゆえ、いつも通り省略しました」のひと言で済ましている。

以上は、この作品中の一例にすぎない。源氏が他の女性に求愛するときの仕方も、だいたい似たようなものである。求愛の全過程において細部の描写は極めて詳細で、雰囲気作りも極めて出色であるけれど、官能美や性的魅力についての描写はむしろ乏しく、容貌や動きなど外在する魅力は重視されていないばかりか、品格や言動、情趣節操など内在する魅力についての描写も重視されていないことが見て取れる。作者が重視したのは過程であり、情愛を表現する作法なのだ。読者は、夕顔の容貌や性格についてはごくおぼろげな印象しか与えられない。読者として得られた美的感覚は、人物の魅力を鑑賞することによってではなく、むしろ主としてこの過程における数多くのこまごまとした体験によるものなのだ。

こうしてみると、求愛の全過程は茶道のように高度に様式化されているのがわかる。「源氏物語」が重視するのは、求愛の過程であって求愛そのものではない。男女が結ばれることは、茶道で茶を飲むのと同じくらい重要なことではない。こうした様式化された長い道のりを辿っていけば、個人が恋愛について感じるのは、強烈な衝動ではなく礼儀作法に合うように洗練されしかもより優雅な形を備えていなければならぬということだ。従って少なくとも当時の日本の上流社会から見れば、一人の人間が道徳的に高尚かどうかは「好色」がどうかではなく、礼儀作法に適った形で自分の感情を表現したかどうかにかかっている。この意味で、『源氏物語』において求愛過程の細々した礼儀作法を重視することは、中国の礼教のようにある種の『ブレイキ』としての役割を果た

すこととなり、これも性本能<sup>(訳注4)</sup>昇華のひとつの形式であるといつても差し支えない。中国人は、『源氏物語』の情愛描写の醍醐味を味わうのが難しく、冗長で面白味に欠けると感じるはずだ。これはおそらく、中国人はその背景に日本人のような茶道の儀式を受け入れる美意識がないからである」と、私は考える。

### 原注

- (1) ここでは、豊子博士『源氏物語』(人民文学出版社 一九八二年版)に拠る。
- (2) 両書に対する比較研究は絶えず発表されている。筆者の基本的調査によれば、近年発表された文章に、李英武『源氏物語』と『紅樓夢』を論ず』(『東北亜研究』pp.62-67 一九九五年第二期)、郭存愛『源氏物語』と『紅樓夢』の比較研究』(『遼寧大学学報』一九九二年第二期pp.30-34)、張坦『仏教の『源氏物語』への影響』(『貴州文芸叢刊』一九九五年第三期pp.334-346)。
- (3) エングルス『家族・私有制及び国家の起原』(マルクスエンゲルス全集 人民出版社 一九九五 第4巻 pp.49-50)

### 訳注

- (1) 作者は本章序文で、「人類は自身の進化と社会の健全さとのために一連の観念や習俗を規定することによって、性欲の満足を制限してきた。これこそが文化の働きなのだ。人類の歴史の各段階において、もし性欲を満たすことを阻害するのに十分な自然の障碍がないときは、人々は一連の習俗的障碍を作り出し、それによって愛情をよりよく享受できるようにした。」文化は性本能の表出にひとつの「ブレーキ」を丹念に設けた。それによって、人類を動物界から脱出させたのだ。」とのべて、この言葉についての詳細な定義を行っている。
- (2) 「人食い」礼教という言葉は、魯迅が『狂人日記』において封建道德として二千年來中国人を束縛してきた儒教を指して言い出したことである。
- (3) いわゆる宋明理学が唱えた修養論である。

- (4) 作者は、本章第二節「性文化における差異」において、「文明社会における人間の性行為は、社会や文化の諸々の制約を受けなければならない。つまり人間の性本能は、昇華されなければならない。」と述べているのを参照。